

1. 開催年月日：令和6年8月20日(火) 15時～
2. 開催方式：対面、web会議ツール、書面にて実施
3. 委員(順不同・敬称略)
出席：鈴木 嘉一・宮崎 美紀子・尾形 敏朗・山川 鉄郎・馬場康夫
web会議ツールにて出席：砂川 浩慶、神田 由築、倉田真由美

放送事業者

代表取締役社長：石原 隆

専務執行役員：山口 真

常務執行役員：宮川 朋之

編成制作局長：小川 英洋

編成制作局：三品 貴志（編成部）、清水拓哉（編成部）、大下直人（編成部）

web会議ツールにて出席：三瓶 祐毅（編成部）、八巻 洋平（編成部）

番審担当：澤 尚志 碓井恭子（記）

4. 議題

- (1) 審議事項：日本映画専門チャンネル「24時間まるごと『おいハンサム!!』」について
- (2) 報告事項：時代劇専門チャンネル「鬼平犯科帳 での十蔵」、
「鬼平犯科帳 血頭の丹兵衛」独占初放送について

5. 議題（1）

日本映画専門チャンネル「おいハンサム!!」は東海テレビと日本映画放送（株）が共同制作し、2022年1月に地上波の深夜枠で放送した連続ドラマ。放送後から熱心なファンが生まれ、2024年4月に続編「おいハンサム!!2」を放送。6月21日には映画版が全国公開された。当チャンネルでは映画公開に向けた特集を編成。地上波未放送シーンを含むディレクターズカット版一挙放送に加え、監督と脚本を担当した山口雅俊のフィルムグラフィーから映画『闇金ウシジマくん ザ・ファイナル』などを放送した。また、映画公開記念として特別番組「こじらせ三姉妹の恋愛遍歴トーク」を制作、放送した。本番組は当チャンネルで複数回放送し、フジテレビを含め系列のローカル局でも放送。また、TVerやYouTubeの東宝MOVIEチャンネルなどでも一ヶ月限定の無料配信を行った。

【審議のポイント】

「おいハンサム!!2」と特別番組「こじらせ三姉妹の恋愛遍歴トーク」について、番組や企画などについての感想、意見を広く求める。

6. 議題（1）審議内容 ※文中敬称略

- ・「おいハンサム!!」は2年前の番組審議会で取り上げた作品で、一気にファンになった。主人公の源太郎のステテコに腹巻き姿は昭和の植木等やバカボンのパパのようで、愛すべき親父そのままの雰囲気が残っていた。また、三姉妹それぞれが適役だったし、妻役のMEGUMIのうまさに唸ったものだった。シーズン2も相変わらずのおもしろさだったが、映画版はそうでもなかった。本作はテレビドラマだからこそおもしろいのかもしれない。深夜ドラマがシーズン化され、次に劇場版が公開される流れは成功パターンとされているが、作品によってはマイナスになることもあるのではと感じた。

- ・ 特番インタビューで私の造語「だめんず」（ダメンズ）という単語が出てうれしかった。本作の成功は、小さくておもしろいエピソードが1話の中にたくさんつまっていることが理由。原作者の伊藤理佐の全作品からネタをピックアップしているから、濃度の高いドラマになる。他の映像化作品では見たことがない手法だ。この作り方だとお父さんひとりが主人公なのではなく誰もが主人公の群像劇になり、感情移入しやすくなる。本作は特に何が起きるわけでもないのに、私たちは見飽きないのがこのドラマのおもしろいところ。だからこそ、映画にはそぐわないという意見に私も同感。映画になると大がかりなエピソードが必要になるが、本作にはそぐわないかと思う。特別番組はインタビューも含めて見応えがあり楽しめた。
- ・ 本作は日本民間放送連盟賞の番組部門 テレビドラマ番組 優秀賞を受賞した。ホームドラマとして楽しめる作品なので「サザエさん」のようにのんびりと見たい。脚本がよくて、台詞のテンポがいい。最近、日本映画専門チャンネル、時代劇専門チャンネル、Netflixでは予算をふんだんに使い、脚本もしっかり作った本格的な作品が多い。もちろんシリアスな作品もいいのだが、テンポがよく、1話完結の軽いコメディドラマ「おいハンサム!!」を合間につまみ食いしたいニーズが視聴者にあるのでは。
- ・ 放送当初からファンだったので、シーズン2もほめ言葉として代わり映えなく、何も起きず、恋も進展もしない点が徹底していて良かった。映画はドラマに輪を掛けて何も起きず、大物俳優の藤原竜也もただひょっこり出てきただけという、もったいない位のキャスティングが素晴らしかった。映画には賛否両論あるだろう。2時間、観客を映画館に拘束しているのに、何の結論もなく大したゴールにも行かない。いつもの三姉妹の恋愛模様がバラバラに入ってくるので、まとまりもない。でも、ファンにはそれがいい。特別番組についてはファンサービス番組としては興味深いが、観客を映画館に引き込む力があるかは疑問。三姉妹のキャラクターに合ったファッションがドラマの魅力でもあるのに、トークに登場する三姉妹役の俳優たちの衣装がドラマとかけ離れていたのは残念だった。
- ・ 小ネタドラマとしておもしろい作品で、クスクス笑って楽しめる作品。これを映画化するのは方向が違うかと思う。お母さん役のMEGUMIはシーズン1の時は若すぎると感じたが、お父さん役の吉田鋼太郎と三姉妹の間をほんわかと繋ぐ感じが出ていて、途中からは違和感はなかった。特別番組については奇抜な衣装にばかり目が行き、話の内容が頭に入ってこなかった。映画に引きつけるというよりは、ドラマをもう一度観たくなった。私自身、お父さんの源太郎より年上世代なので、娘を持つ父の視点で観ているが、娘世代と同じ30〜40代の男性ファンは本作をどう楽しんでいるのか知りたい。
- ・ 家族でリモート会議をしている最中に長女はドライヤーで髪を乾かしている、テレビを見ていたら家族が次々と来てその度に頭から見直す羽目になる、新商品があったらすぐ試してみるとか、あるあるネタの密度が濃い。映画でも同じ密度とテンポだったので、コメディものとしては最もおもしろい部類だろう。お母さんが若すぎる問題については、そんなことあるわけないだろうというのがフィクションのおもしろさだ。山口雅俊監督にお母さん役のキャスティングについて聞いたところ、本当か冗談かはわからないが、始めからMEGUMIありきの企画だったそうだ。特番についてはドラマ自体が凝った作りなのに、特番は台本にあまりひねりがなく普通にサッと撮った印象で、もう少し手を加えてほしかった。映画は批評サイトでは大絶賛だったので、世間の人と少々退屈つと感じた自分の感覚の違いに改めて気づいた。
- ・ シーズン1でファンになったので、シーズン2は期待して観ていた。シーズン1で思わぬ人気作品になったものは、期待値が上がる分プレッシャーがあり、その後人気を持続するのが難しいものだが、もの

ともせず、我が道を行くテイストの健在ぶりがこのドラマらしくて頼もしい。恋と家族とご飯をめぐるホームコメディというキャッチフレーズだが、それに加えて仕事場がチラチラ出てきてダイバーシティとかSDGsとか現代的な課題を主張しすぎず、だけどチクッと攻めてくる、その攻め方もうまい。家族という普遍的なテーマと、現代的なものの掛け合わせ方が魅力的だ。家族はどこに居ても家族という古くて新しいテーマを主張し過ぎずにサラリと提示する巧みさもある。ただ、映画とテレビドラマは文法が違う。ヒットドラマへのご褒美に映画化が用意されているのは、どちらにとってもいいことばかりではない。

- ・ わずか2年間でシーズン1、2が制作され、映画まで作られたのは大成功だ。今の地上波では絶滅に近いホームコメディだが、三姉妹の恋愛模様を絡めた点に若い世代が食いついたのだろう。キャスティングも今の地上波の感覚で見ると、吉田鋼太郎はわかるが、三姉妹とお母さんのキャスティングは山口監督ならではのセンスで、ありそうでないおもしろい組み合わせ。シーズン2の第1話ラストで「限定された視野で、見えないからこそ本質を捉えられたんだ」と偉そうに父が娘たちに一席ぶつが、今、実生活でこのように振る舞う昭和のオヤジはいそうでない。でも源太郎は家庭でも職場でもなんだかんだ言われても頼りにされている。これは今どき珍しい。山口監督の願望やノスタルジーが、お父さんに込められているのではと感じた。昭和の遺物のようなお父さんと、女4人のバトルを今後期待したい。

これに対して弊社からの回答は以下の通りであった。

- ・ 映画は女性の支持が強く、特に長女の由香と同世代の30～40代の方から恋愛模様やお父さんとのやりとりは共感を覚えるとコメントをいただいている。評判が良かった。男性からは、三姉妹の恋愛模様で描かれる男の悪い振る舞いが参考になったとか、モラハラと見なされる可能性があるという学習したとの声があった。また、源太郎の言葉は説教臭くなく、人生の先輩から贈られる宝物のような言葉だった、という反応があった。由香の元恋人、大森にも男の美学を感じるという声もあった。特別番組の衣装に関しては、ドラマを知らない人にも届ける宣伝番組でもあるため、ドラマの衣装を踏襲するのではなく、明るめでパステル調のご本人らしい衣装でオーダーした。
- ・ 全般的に実写映画が厳しい現状であり、公開週はランキングに入ったが、もう少し興行的に行ってほしかったのが本音。Netflixなどでディレクターズカット版はドラマランキングで1位を記録した。本シリーズはドラマ形式のほうが強いのかと感じている。ただ、映画にしたことで「おいハンサム!!」を知らない方が多いことがわかった。映画を入口にドラマシリーズに移行する観客がいたので、相乗効果はあったようだ。共同制作の東海テレビからは、サイコパス的なダークな登場人物のドラマや医療ドラマが多い中、このようなホームコメディはクライアントが喜んでおり、営業的にもかなり貢献できたようだ。
- ・ 「おいハンサム!!」は新しいスタイルの作品。衛星放送局と地上波局が組んで共同製作し、弊社からはプロデューサーを立てて、最初の放送は地上波からという新しいパターンだ。地上波では減少気味のホームドラマというジャンルだが、根強いファンがいる時代劇や地上波ではできない作品や地上波が止めていったジャンルを掘り起こすのが、我々の使命かもしれない。また、ドラマからの映画化に関するご意見を伺い、映画的とは何かということを考えさせられた。いずれにしても地上波放送、衛星放送、劇場映画、配信と縦横無尽に駆使して、今回の作品はウィンドウを開いていった。今後もこういったケースが増えるはずだ。それぞれのウィンドウ特性に合わせたコンセプトや内容を考えていきたい。

7. 議題（2）報告事項

時代劇専門チャンネル「鬼平犯科帳 でくの十蔵」「鬼平犯科帳 血頭の丹兵衛」6月・7月独占初放送について

2024年に松本幸四郎主演の「鬼平犯科帳」SEASON1がスタートし、1月にはテレビスペシャル、5月には初の劇場版『血闘』が公開された。続く6月、7月には第3弾「鬼平犯科帳 でくの十蔵」、第4弾「鬼平犯科帳 血頭の丹兵衛」を放送し、本編後には豪華キャストが作品の舞台裏を語り合うスペシャルトーク番組も放送。SNSでは本編とアフタートークでの出演者たちのギャップがよかったと、とても好意的なコメントが多かった。本シリーズは配信でも展開しており、Amazon Prime Videoでは課金が必要な「時代劇専門チャンネルNET」でも配信回数が増加中で、配信で鬼平を見るファンを獲得している。続くSEASON2は撮影が終了しており、時代劇専門チャンネルの新作として来年放送予定。また来年5、6月にはSEASON3の撮影を計画しており、現在、脚本開発中である。

9. 連絡事項

次回91回番組審議委員会は、2024年11月12日(火)16時より、オフライン、オンラインのハイブリッドにて開催予定。